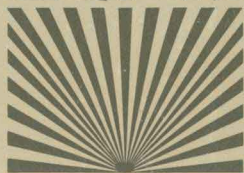


近代文学

作家とその世界①

ゼミナル



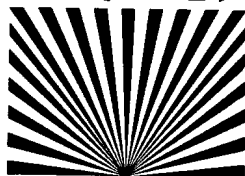
篠田一士
野口武彦
山崎正和
猪野謙二

朝日新聞社

現代文学

作家とその世界①

ゼミナル



篠田一士

野口武彦

山崎正和

猪野謙二

朝日新聞社

講師略歴

篠田 一 士 東京都立大教授 昭和2年 岐阜県生まれ 著書
「邯鄲にて」「日本の近代小説」など。

野 口 武 彦 神戸大助教授 昭和12年東京都生まれ。著書「谷
崎潤一郎論」「頼山陽」など。

山 崎 正 和 関大教授 昭和9年 京都府生まれ。著書「鷗外
(闘う家長)」「芸術現代論」など。

猪 野 謙 二 学習院大教授 大正2年宮城県生まれ。著書「近
代日本文学史研究」「明治の作家」など。

◇近代文学・作家とその世界Ⅰ◇定価1000円◇著者
篠田一士 野口武彦 山崎正和 猪野謙二◇昭和50年
5月15日第一刷発行◇発行者 朝日新聞社・宇野 博
◇印刷所 内外印刷◇発行所 朝日新聞社（東京・大
阪・北九州・名古屋）0391-254301-0042

目

次

藤村	篠田 一士	1
----	-------	---

『夜明け前』について	3
------------	---

はじめに——膨大な点が問題——日本の小説——西欧文学の伝統——鷗外・露伴・藤村——作品中の自然描写の役割

『家』について	30
---------	----

文芸作品を損なう注解——みごとに描かれた古い「家」——主人公がいない小説——自然主義から私小説へ——すぐれた社会小説——藤村文学の読み方

潤一郎	野口 武彦	61
-----	-------	----

谷崎文学の世界	63
---------	----

谷崎潤一郎の外堀と内堀——谷崎の文学史的位置——フェミニズムの作家——谷崎と三島由紀夫——愛とエロスの夢想——愛についての伝統的想念——谷崎の女性的世界——母親イメージの問題

作家像と現実の作家	100
-----------	-----

谷崎文学とマゾヒズム——創作活動の時期区分——大正初年の潤一郎——最初の結婚千代子夫人——小田原事件をめぐって——『痴人の愛』の成功——女性思慕の主題——『瘋癲老人日記』——二つの流れの総合

鷗外	山崎 正和	141
----	-------	-----

鷗外の性格と作品	143
----------	-----

鷗外の生きた時代——森家の家系と鷗外の位置——ナウマンとの論争——恋愛と結婚——固有の趣味が持てない人

作品に現れた時代感情	178
------------	-----

永遠の不満家——中産階級の誕生と家長の座——文学に表れた不機嫌——『牛鍋』と『綱走まで』——鷗外・漱石・直哉・荷風——鷗外の生き方

漱石	猪野 謙二	215
----	-------	-----

漱石の位相とその本領	217
------------	-----

漱石と『写生文』——虚妄の青春——明治日本の近代化と知識層——「スウィフトと厭世文学」——漱石とスウィフトその実人生と文学

『吾輩は猫である』を中心に	249
---------------	-----

相対化による全体化——『猫』の成立をめぐって——漱石文学の原点

——朝日ゼミナール「近代文学・作家とその世界」から——

装幀・山本耕三

藤
村

篠
田
一
士

『夜明け前』について

藤 村

はじめに 島崎藤村の話をせいということなんですが、私は島崎藤村の特別の研究者というわけでもありませんし、近代日本文学を専門にしている人間でもございません。まあ文芸批評の仕事をやっておりまして、島崎藤村は昔から非常に好きで読んできている、特にきょう話題にいたします『夜明け前』という藤村の晩年の大作について何度か書いてまいりましたが、この『夜明け前』というものが、専門家の藤村研究家の間でも、軽んぜられてはいないのですけれども、詳しく説明されていない。これは非常に嘆かわしいことだという気持ちから、『夜明け前』について書きもいたしましたし、機会があればその持つ意味を私なりに説明して、一人でも多くの方に読んでいただきたいという気持ちがありましたので、今回のこういうお話を喜んで引き受けさせていただいたと思います。

島崎藤村の文学全体の概観といえますか、そういう点ですとすでにいろんな専門家の本が出てお

りますので、皆さん方はおそらくそういうものをお読みになっておりましょし、読もうと思えば簡単に読めますので、きょうは『夜明け前』について話をさせていただいて、来週は『家』という彼の中期の、これもある意味での傑作なんです、いままでの島崎藤村論では扱っていないような面から『家』の持つ意味を考えてみたい、というふうに考えております。

島崎藤村は一八七二年に生まれて一九四三年に亡くなっております。七十二歳ということになります、いまでもそれほど長寿でもありませんけれども、戦前の作家の中では長寿に属するわけですね。漱石は五十歳、鷗外は六十歳で亡くなっております。七十二歳まで生きて、しかも文壇歴といえますか、彼の作品活動というものは明治二十年代のはじめから始まっておりますから、一八九〇年ぐらいから死ぬまで彼は筆を執り続けたわけです。

亡くなったときには『東方の門』という『夜明け前』の続編、というところと当たらないかもしれませんが、『東方の門』の全貌がよくわかっておりませんので何ともいえませんが、『東方の門』という長編を三回ぐらい書いたところでしたから、やっぱり五十年以上に及ぶ作家活動をしているわけです。

念のために一応目じるしになる彼の作品を申し上げておきますと、『若菜集』に始まる四つの詩集がありますが、これが日本の近代詩の出発点にあたるもので、明治三十年から三十四年までの間に書かれております。そのあと少し時間が欠けて、彼は詩人であることをやめて小説家になろうとして、その間にいろいろ短いものを実験的に書きまして、そして一九〇六年（明治三十九年）に、



氏士田篠

『破戒』という例の有名な長編小説を書きました。それからそのあと一九〇八年（明治四十一年）に『春』というのを書いております。

『破戒』と『春』の間というのは、藤村研究の上では一つのポイントになるわけですね。つまり『破戒』はいわゆる正統的な近代小説、ヨーロッパの近代小説と同じような意味での近代小説であつたのに、『春』というのは自伝的な、はつきりいいますと私小説ですね。当時はまだ「私小説」という言葉はなく、大正時代になって志賀直哉あたりが出てきてから私小説というものが確立したわけですが、その最初の記念碑的な作品です。ですから『破戒』で日本の近代小説が西欧的な、つまり本格小説に成長する萌芽を持っていたにもかかわらず、『破戒』の作者その人が、『破戒』

の次の作品においてみずからの芽をつんでしまつて、日本的な、きわめて本格的でない、非常にせま苦しい、ロマンス的なものでない私小説へ変更した、というふうな点で、『破戒』と『春』の間のカーブといえますか、ギャップといいますが、それがいつも問題にされるのです。

『春』のちょっと前に書かれた、田山花袋の『蒲団』という有名な小説がありますが、『蒲

『団』と『春』が日本の私小説の元祖である、そしてそれは日本でヨーロッパ的な本格小説が屈折した、ある意味では悲劇的な作品であるというふうな問題は、必ず藤村論で行われておりますから、この問題は今回は触れないことにいたします。

それから一九一一年（明治四十四年）に、この次にいたします『家』という作品が書かれているわけです。そのあとのおもな作品は一九一九年（大正八年）に『桜の実の熟する時』という、題材的には『春』の前の部分にあたる作者の自伝を書いたものですが、一九一九年のちょっと前に何度か分けて書かれて、一冊の本にまとまったのが一九一九年です。それから一九一九年には、非常に有名な問題を投げかけた『新生』が書かれています。それからそのあとは、これは長編小説というよりは中編小説というべきものですが、しかし藤村の小説家としての技量を、ある意味ではいちばん高度に發揮した作品で、ぼくとしては忘れていただきたいものですが、一九二一年（大正十年）に『ある女の生涯』が書かれています。それから一九二六年（昭和元年）に、『嵐』という小説を書いております。この二つは作品としていいものですけれども、中編というか、『嵐』のごときはちょっと長い短編小説といったほうが正確かもしれません。

そしていよいよ一九二九年（昭和四年）に『夜明け前』が発表され始めるのです。それが一九三五年（昭和十年）まで続きまして、前編、後編を合わせた膨大な『夜明け前』が完成するわけですね。それで島崎藤村の主要な作品は全部終わるわけです。はじめに申しましたように一九四三年、つまり死の年に『東方の門』が発表されて、これが「中央公論」に確か三回載ったきりで、あとで

本にまとまったかと思いますが、いまはもちろん全集に入っておりますが、出だしのところだけ書かれたまま未完で終わっています。

いま作品発表の年代を西暦で最初に申しまして、あとで明治何年、大正何年というふうに加えていったんですが、これはちょっと妙ないい方をするものだと思いかもしれませんが、これからは少なくとも日本の近代文学を考えていくときには、まず西暦で考えるようにしていきたいというのが、私がかねがね主張しておることなんです。と申しますのは、これからは日本の近代文学は、必ずアメリカあるいはヨーロッパ、その他のいわば世界的な視野の中でとらえていかなければならないし、事実そういう傾向がだんだん盛んになってきているんです。そうすると明治何年とか大正何年とかいっても、たし算をやったりひき算をやったりしたいへんめんどうなんです。ぼく自身、自分の生まれた年からですと、西暦と日本の天皇紀元の年号とうまく重ねていえるのですけれども、明治、大正という年代になると、もう重ねていえないですね。いちいち年表を見たりして非常に不便です。そういう意味で、西暦をまず主に立てて、それからそのあとで明治、大正、昭和といういい方をつけていったほうがよろしいのではないかと思ひまして、こういういい方をさせていただきます。

膨大な点が 問題

それで『夜明け前』という作品なんですけれども、きょうおいでになっている方で藤村ファンの方、藤村の小説あるいは文学が大好きだという方はたくさんいら

っしゃるでしょうけれども、そういう方の中で、『夜明け前』を全部読んだ方、それから『夜明け前』というのはおもしろくてたまらないから、一度ならず二度も三度も読んだという方がいらっしゃるでしょうか。およそ世界の小説の中で、『夜明け前』ほどおもしろくない小説はまずないだろうと思うのです。これはぼくも認めます。

ただ、長い小説だから読みづらいということでしたら、ほかにいくらでもあります。たとえばブルーストというフランスの二十世紀小説家の書いた『失われた時を求めて』というのは、『夜明け前』より長いはずですが、これもたいへん読みにくい。特にはじめの三分の一ぐらいは大変です。けれども三分の一を読みきれば、あとはページをくるのもどかしいというほどではないにしても、かなり興味を持って先に先に進むことができます。

ほかに、たとえばトルストイの『戦争と平和』、これも終わりに妙な———というトルストイに悪いですが、非常に独特な歴史論がついてまして、これもたいへんですし、あれだけ長いものを読むのもなかなか苦勞がいますが、しかし小説をいかにも読んでいるという楽しさは、ブルーストの場合にも、トルストイの場合にもあるわけなんです。ところが『夜明け前』の場合には、小説を読む楽しみとは別の楽しみ——ぼくは楽しみだというお話をこれからするつもりでおりますが、苦しみといったほうが適切かと思うのですが、とにかく退屈でしょうね。

いずれにしても、『夜明け前』というのはまず膨大、長いということが問題なんです。

この小説を読んでない方のために、全く簡単な方で説明しますと、これは、幕末から明治十

八年ごろまでの時期を舞台にした歴史小説です。そして大体中心になるのは木曾路のいちばん西はずれの馬籠というところ、これはいまでもありまして藤村会館のあるところですが、馬籠という宿場町を主たる舞台にしております。ただそれがときどき、日本全国といういい過ぎになるけれども、東京とか京都とかに移ります。東京といっても前半は江戸というておりますが。そのほかに尾張名古屋、木曾路の中心地である福島あたりも出てきます。それから木曾路の東になりますか、南になりますか、伊那谷という天竜川流域も舞台となって、そして大体三十年あるいは三十五年ぐらいいにわたる、日本の近代史の中ではもっとも激動した時期を扱っているわけです。主人公は青山半蔵で、この人の生涯が一つの軸みたいになって、この小説の始めから終わりまで物語られているわけです。

小説的な興味からいいますと、青山半蔵という人物の生涯はどういう生涯であったかということに焦点をあてて書いていけば、それはそれでおもしろい小説になったわけなんです。『夜明け前』をお読みになると、青山半蔵の生涯に直接関係のないいろいろなことが書いてあるので、それでウンザリというか、退屈というか、ともかくおもしろくないということになるわけですね。

青山半蔵という人物は、実は藤村自身の父親がモデルになっているんです。藤村は馬籠部落の本陣のせがれとして生まれている。本陣というのはいわゆるその土地の名家で、代官とは違うのですけれども、その辺のいろんな世話方みたいなことを取りしきって、参勤交代で中山道を行き来する大名なんかの宿を提供するうちだったんですが、そのせがれとして藤村は生まれました。お父さんは

正樹といって、青山半蔵のモデルになっている人物ですが、しかしモデルの問題はあまり気になさる必要はないと思うのです。

青山半蔵は本陣のあと継ぎに生まれて、本来家業を継ぐべき人だったんですけれども、この人はなかなか学問が好きなんです。近隣のいろんな学者について勉強したわけですが、当時は国学が日本全国に流行して、特に木曾谷から伊那谷にかけて、平田篤胤の国学流派が非常に勢いを持っていたんです。それに彼は熱中したわけですね。

いまは国学なんていうと古めかしい感じになりますけれども、当時の国学というのは一種の革命の学問なわけです。いまでいうとマルクスなんかより革命的ですね。トロツキー、赤軍派の諸君が一生懸命勉強するような革命論、あれに近いような過激なものを持っていたわけです。国学の中でも平田派というのはいちばん過激なわけです。非常に実践的な要素がありまして、いわゆる勤皇の志士の行動なんかと直結するような学問なわけです。当時の江戸幕府は朱子学しか認めませんから、国学なんかは問題にしないどころか、異学として排斥しています。本陣のあと継ぎであるような人物が、国学、それも平田学派を勉強するというのが、すでにかなり危険なわけなんです。

しかし、それを親の目をかすめてせっせと勉強して、勉強すれば当然いまの幕府はまちがっている、幕府の存在は日本の本当の政治のあり方ではない、日本の政治のあり方は天皇親政である、というのが彼らの主義主張なんですけれども、そういうふうな革命的な理念を、青山半蔵は^{よわい}齡二十歳になる以前から抱くわけですね。そして志士のような人たちとときどきつながりもあって、京都あ

たりから逃げてくる志士をかくまったりするというふうなことで、現代に当てはめてみればいろいろうまく思いあたるような事件も人物もすぐ考えられると思うのですが、そういうことをしていたわけです。

しかし、彼は直接行動は一度もしないのです。やっぱり親のことを考え、家のことを考えてでしょうけれども、そういう点はいへん保守的といいますか、事なかれといいますか、気が弱いといえますか、まあ気が弱いというのが性格なんですけれども、だけれども彼自身はいつも心の中で燃えるような思いで、王政復古の夢を抱き続けているわけです。このところがなかなかよく書けているんです。

彼の夢が時の流れとともに行きつ戻りつしながらも、結局慶応何年というような年代に入ってくると、薩長連合とかそういうことで幕府の力がだんだん弱ってきて、いよいよ王政復古が実現するわけです。そこからがこの小説のおもしろいところで、いよいよ下巻に入るんですけれども、王政復古になった、京都から江戸へ天皇が都を移して、天皇親政の時代が始まるんだといって、彼は狂喜するわけです。そして江戸も東京という名前に変わるわけです。

そのころはどこにもあったんですが、国学者の連中は一応明治政府に抱えられるんです。つまり神祇官とか文部省の役人になってわが世を得るわけなんです。彼もいままでの功績を認められて東京へ出仕といいますか、官吏になって、確か文部省の役人だったと思うのですが、出かけていくんです。